

令和 7 年 度

# 研究紀要

第 2 1 号

秋田県立男鹿海洋高等学校

# 令和 7 年度 研究紀要 目次

巻頭言 . . . . . 校長 野呂田 義彦

## I 研究授業

○実施要項

○学習指導案と協議会記録①（英語科） 授業者：石井 俊

○学習指導案と協議会記録②（水産科） 授業者：畠山 康治

○授業のユニバーサルデザイン化の取り組みと成果 . . . . . 教務部・研修部

## II 研修記録

○令和 7 年度秋田県総合教育センター研修講座受講者

○校内教員研修①（実習体験） . . . . . 海洋科

○校内職員研修②（生徒指導） . . . . . 研修部

## III その他の記録

○令和 7 年度校種間連携研修（要項）

○令和 7 年度教職インターンシップ（要項及び参加学生の感想）

編集後記 . . . . . 研修部

# 巻 頭 言

校長 野呂田 義彦

教育基本法第1条において、教育は「人格の完成」を目指すと定められています。かつてカントが説いたように、その到達点は無限の道徳的進歩を必要とする険しい道のりかもしれません。しかし、激動の2026年、生成AIの急速な普及や予測困難な経済情勢という荒波の中にいる我々にとって、その「完成」への歩みこそが、生徒たちが未来を生き抜くための「挑戦」そのものであると確信しています。

本校では今年度、教育活動のテーマに「挑戦」を掲げ、「基礎学力の定着を目指して、生徒が主体的に活動し、成就感が得られるような学習支援」に全校を挙げて取り組んでまいりました。文部科学省が推進する「令和の日本型学校教育」においても、誰一人取り残さない「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められています。本校が実施してきた「授業のユニバーサルデザイン化」は、まさにこの理念を具現化する挑戦でした。

学習目標や授業の流れを可視化し、板書や指示に工夫を凝らすユニバーサルデザインの視点は、多様な背景を持つ生徒たちに「わかる」という確かな手応えを与えました。今年度の成果として、これまで学習に苦手意識を感じていた生徒も含め、全ての生徒が主体的に参加し、「成就感」を実感できたことは大きな飛躍です。これは、単なる知識の伝達を超え、教職員一人ひとりの、絶え間ない研究と修養の賜物と言えるでしょう。

しかし、教育に「完成」はありません。本研究紀要にまとめられた実践報告は、我々が日々の教育活動の中で正対した課題の記録であり、次なる改善への出発点です。今後は、得られた成果をPDCAサイクルに確実に乗せ、データと実践に基づいた授業改善を継続していく必要があります。

我々教師の力量の中核をなすのは、やはり「授業力」です。同僚との対話を深め、組織として協働的に取り組むことで、男鹿海洋高等学校の教育の質をさらなる高みへと引き上げていきましょう。

最後に、日々生徒と向き合い、共に学び、挑戦し続ける教職員の皆さんの熱意に敬意を表するとともに、本紀要が本校の未来を照らす確かな「航海図」となることを願い、巻頭の言葉といたします。

# I 研究授業

○実施要項

○学習指導案・協議会記録①

○学習指導案・協議会記録②

○授業のUD化の

取り組みと成果

# 令和7年度 校内研究授業研修（兼指導主事訪問）実施要項

男鹿海洋高校

## 1. 目的

- ・「授業改善重点事項」や「3つの手立て」を意識した研究授業を計画、実践する。
- ・授業参観・研究協議会を通して全職員が成果や課題等を共有し、学習指導力向上に活かす。

## 2. 今年度の授業改善重点事項

基礎的学力の定着を目指して、生徒が主体的に活動し、成就感が得られるような学習支援を推進する。

〈手立て〉

- ・学習目標とゴールを明確に設定し、それに基づいた授業デザインを考え、生徒との共有を意識して授業に臨む。**（今年度は「授業の流れ」の可視化を重視）**
- ・生徒の主体性や学習意欲を刺激するような指示・発問を工夫し、対話を通して問題を解決する場を設定する。
- ・学習への興味・関心を高め、学びを深める手段として、ICTを効果的に活用する。

## 3. 期 日 令和7年10月27日（月）

## 4. 日 程

1～4校時は、  
月曜日の時間割  
通りの授業を実施  
（特割なし）

1校時	8：40 ～ 9：30	指導主事来校（9：30）
2校時	9：40 ～ 10：30	校長面談
3校時	10：40 ～ 11：30	諸表簿閲覧
4校時	11：40 ～ 12：30	授業参観（全クラス）
SHR	12：40 ～ 13：15	研究授業クラス以外放課
昼休み	12：40 ～ 13：15	研究授業クラスのみ
5校時	13：15 ～ 14：05	<b>研究授業（2クラス）</b>
SHR	14：05 ～ 14：15	研究授業クラス放課
	14：20 ～ 15：10	<b>研究協議（2会場）</b>
	15：20 ～ 16：10	<b>全体会</b>

## 5. 研究授業クラス・授業者・教室

クラス	科 目	授業者	教 室
2年海洋科	英語コミュニケーションⅡ	石井 俊	2年海洋科教室
1年海洋科	漁 業	畠山 康治	1年海洋科教室

※授業の参観は、普通教科職員は「英語コミュニケーションⅡ」、水産科職員は「漁業」とします。適宜両方の授業を参観しても構いませんが、研究協議会は所定の協議会に出席してください。

※授業者は、10月22日（水）までに「学習指導案」を研修部の所定フォルダへ保管してください。印刷・配付は研修部で行います。指導案以外に配付する資料等も、保管していただければ一緒に印刷・配付します。

6. 研究協議会 14:20～15:10（50分間）

研究協議会	授業者	場 所	参加者と役割
協議会① 科目：英語コミュニケーションⅡ	石井 俊	2年海洋科教室	担当指導主事：浅野 朋央 先生 参加者：普通科教職員 進行：伊勢 記録：安倍
協議会② 科目：漁業	畠山 康治	1年海洋科教室	担当指導主事：大淵 亮 先生 参加者：水産科教職員 進行：石崎 記録：佐藤（江）

※協議会②については、不足分の椅子を1普・1食教室から補充する

[協議会の進行]

①授業者から所感

授業改善重点事項についてどのような工夫をしたか。今日の授業の感想および課題など。

②参観者から感想

「3つの手立て」について、良かった点と課題点を指摘しながら付箋を模造紙に貼る。

③指導主事より指導・助言

7. 全体会 15:20～16:10（50分間）

	会 場	参加者と役割
全 体 会	会 議 室	指導主事：大淵 亮 先生 浅野 朋央 先生 湯澤美千代 先生 参 加 者：全職員 司会進行：澁谷 明人 教頭

[全体会の進行]

①指導主事より講評（約45分）

②校長より（約5分）

8. 研修部業務分担

	伊勢	石崎	佐藤	安倍
付箋・模造紙準備など	◎		○	
指導案印刷・事前配布	◎			○
分科会司会・全体会報告	英語	漁業		
分科会記録			漁業	英語
会議室の会場設営	◎	○	○	○
記録（写真）	○			◎

# 英語科「英語コミュニケーションⅡ」学習指導案

実施日時： 令和7年10月27日(月)5校時  
対象： 男鹿海洋高等学校 2年海洋科（24名（男22・女2））  
授業者： 石井 俊  
使用教科書： Comet English Communication Ⅱ （数研出版）

- 1 単元名 Lesson 1 Places Worth Visiting
- 2 単元の目標  
"The place worth visiting of mine（自分が行ってみたい場所）"を英語で紹介できるようになる
- 3 単元と関連する CAN-DO 形式での学習到達目標  
身近な短い文を聞いて話の概要や内容を理解できる。（A 聞くこと）  
定型表現を用いて考えを伝え、また質問をすることができる。（C 話すこと（やりとり））  
短い文で感想や意見、理由を述べるができる。（D 話すこと（発表））

4 単元の評価規準（本文）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"><li>本文の内容を読み、概要や要点を把握することができる。</li><li>必要な語彙や表現を習得し、それを活用して自分の考えを話したり、書くことができる。</li><li>行ってみたいところについて他の生徒とやりとりすることができる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ダイキとエラの旅先での経験について理解を深めるために、本文の内容を読み取り、海洋や要点を把握している。</li><li>本文の内容に関連して、自分の意見を話したり書いたりしている。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>ダイキとエラの旅先での体験について理解を深めるために、本文の内容を読み取り、概要や要点を把握しようとしている。</li><li>自分の意見を話したり書いたりしようとしている。</li></ul>

- 5 単元観  
本単元は、2人の高校生ダイキ（日本）とエラ（トルコ）が、それぞれ訪れた屋久島とカッパドキアを E メールで紹介し合う内容となっている。自分が行ってみたいところについてペアやグループで紹介し合う活動を通して発信する力をはぐくませたい。本文の英文構成は平易だがつづりの長い語が多く、本校生徒にはややハードルが高い。

- 6 生徒観  
入学当初の聞き取りでは「小学校や中学での英語の授業は何も分からなかった」の回答がほとんどだった。文字を書く動作に強い苦手意識を持つ生徒もいる。その後の観察を通じて、個々のアルファベット文字の認識と“-thr-”、“-ous-”等の複数文字を組み合わせた発音パーツの音声化に困難を感じていることが分かってきた。その克服を支援する目的で、英語文字と音声の組み合わせを学習するフォニクストレーニングを取り入れている。「英語は表音文字、頭から順番に発音すればよい、パーツの発音を覚えれば楽」を強調して継続しているが、その効果が徐々に現れつつある。
- 小学校での英語教育導入後、既に5年が経過した。文部科学省「令和6年度英語教育実施状況調査」によれば英検3級程度の力のある中学生は全国平均52.4%で、秋田県では42.0%だった。逆に言えば、このデータは全国で約50%、秋田県では約60%がその力がないことを示唆するものだ。日本の学校英語教育には英語ディスレクシアを抱える児童生徒に対する支援や指導法に関する研究が未発達である問題と早急な対処の必要性を指摘する声もある（別紙参考文献参照）。
- 今回の授業では指導要領に即した言語活動としてインタビューを行うが、聞き取って書くという動作が入る。英語が極めて苦手な生徒たちがそれをどのように行うか注目したい。

- 7 指導観  
本文の理解や発表に向けた準備として、まず語彙の習得に力を入れたい。自分が行ってみたいところを探したり、その場所の特徴などについての情報収集や、それを英語でどう表現するかなどを考えたりなど、いろいろな場面で ICT を活用して表現意欲を高めたい。

8 単元の指導と評価の計画（総時数：7時間）

1～4時間目の観点別評価：一斉に記録に残す評価は行わない。ただし、狙いに即して生徒の活動の状況を見届けて指導に生かすことは毎回行う。

時		主な言語活動等	知技	思判表	主
1	Warm Up Vocabulary	・導入、Warm Up！ ・語彙学習 ・行ってみたいところについて話す			
2	Section 1	・本文理解、音読 ・ダイキのエラあてのメールに書いていることについてペアで質問しあう ・日本国内で行ってみたいところはどこか尋ねたり答えたりする			
3	Section 2	・本文理解、音読 ・エラのダイキあてのメールに書いていることについてペアで質問しあう ・外国で行ってみたい国や場所について尋ねたり答えたりする			
4	発表練習	・例文をアレンジして自分の行ってみたい場所を紹介する英文を作る ・グループ内で発表する			
5 6	発表準備	・“The Place Worth Visiting of Mine”の題でプレゼンテーションを作る	○	○	○
7	発表	・5～7人のグループ内で発表、相互に評価し合う	○	○	○

9 本時の学習（本時1／7）

（1） 目標 ①行ってみたいところについて、質問したり答えたりできるようになる。

②必要な語彙と表現を習得する。

（2） 本時の展開（50分）

過 程	学習活動	教師の支援及び留意点
導 入 10 分	○Today's Phonics スライドに表示される語句の発音練習	発音パーツを意識させる
展 開 35 分	○本時の学習課題および授業の流れの確認 ○語彙学習 本時の活動に必要な語彙と表現  ○モデルトーク練習  ○インタビュー活動の準備  ○インタビュー活動  ○ インタビュー結果レポートを書く ○3～4人のグループで結果レポートを発表する	○黒板に掲示 ○スライド使用  ○プリントのモデルトークを一度教師が読み聞かせた後、復唱させる  ○リストの中から自分が行きたいところとそこでやりたいことを選び、定型文を穴埋めさせる ○なるべく多くの人と質問したり、答えたりし、その結果を記録させる ○プリントの定型文を穴埋めさせる ○聞く人の方を見て話すように指示  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【評価】①行ってみたいところについて、質問したり答えたりできるようになる。②必要な語彙と表現を習得する。（活動の観察） 【思考・判断・表現／主体的に取り組む態度】</p> </div>
まとめ 5 分	○振り返りシートに自己評価を記入する ○次時の見通しをもつ。	○必要に応じて助言をする。 ○個々に事前準備や練習ができるように、次時の活動について説明する。



## Comet II Lesson 1 opening section worksheet

目標:「行ってみたいところ」を英語で話したり、聞いたりできるようになる

### Today's Vocabulary

語句	意味	分かったら○
a place worth visiting		
want to go to ~		
visit museums		
enjoy foods		
try big game fishing		

### モデルトーク

A: "Hi. Can I ask some questions about travel?"

B: "OK."

A: "Which place among the list do you want to go?"

B: "Let me see ... I want to visit Egypt."

A: "Egypt! What do you want to do there?"

B: "I want to ride a camel and see the Great Pyramids."

A: "Oh, that's exciting."

B: "Yeah. How about you?"

A: "I want to go to Australia and try big game fishing!"

List "Places and Famous Things"

Places / country	count	Famous Things enjoy
Kyoto, Osaka and Kobe, Japan		temples and shrines, culture, foods, Yoshimoto Theater, Koshien, etc...
Okinawa, Japan		beautiful sea, diving, surfing, fishing, foods
Los Angeles		Hollywood, Dodger Stadium, Disneyland Resort
Hawaii		beach, surfing, driving, big game fishing
Spain		Sagrada Familia, museums, bull fight(闘牛), foods, soccer game
Australia		animals (koalas, kangaroos, penguins, etc...), diving, big game fishing
Italy		historical cities as Rome, Firenze and Venezia, foods, arts, etc...
Egypt		The Great Pyramids, camel riding(ラクダ), hot-air balloon ride (熱気球)

~Interview~

- ① 自分が行きたいところとやってみたいことを選ぶ (複数あってもよし)
- ② モデルトークの表現を使ってなるべく多くの人とインタビューし合い、上のリストに結果をメモする

~Interview Result Report~

I interviewed ( ) people about places worth visiting and popular activities.

The place No.1 was ( ). ( ) people chose this.

The place No.2 was ( ). ( ) chose.

The place No.3 was ( ). ( ) chose.

The popular activities were ( ) and ( ).

I feel like visiting ( ) and want to ( )!

~今日のふりかえり (Yes / So, so / No)~

目標達成できた ( ) 学んだ英語が身についた ( ) 一生懸命やった ( )

Class: No: Name:

(別紙 参考文献)

「日本人ディスレクシア児における英語音読困難の特性と練習支援システムの構築」

著者：勝間田里菜（東京大学） 発表年：2025 年 1 月

概要

ディスレクシア児の英語音読における「非流暢性」や「発音誤り」を分析し、フォニックス学習法に基づいた支援システムを開発。3 週間の練習で発音の改善が確認された。

「第 1 章 序論 1.1 本研究の背景」にディスレクシアの定義、日本の学校英語教育におけるディスレクシア支援の現状について簡潔にまとめられている。

「日本の英語教育におけるディスレクシア生徒に関する一考察」

著者：村上加代子 発表年：2012 年

概要

日本の英語教育現場におけるディスレクシア児童の困難と支援の現状を事例とともに考察。音韻認識の弱さが英語習得に影響する可能性を指摘。

「日本人幼児における英語の音韻認識

— 日本人幼児にふさわしい英語教育について考える —」

著者：湯澤正通・関口道彦・李 思嫻 発表年：2007 年

概要

日本の子どもの英語習得に関わる研究を展望し、英語の音韻認識の発達の観点から、幼児期の日本の子どもにふさわしい英語教育のあり方を考察。フォニックス指導の有用性を示唆。

「小学校英語の課題—フォニックスの導入に向けて—」

著者：平野美沙子 発表年：2012 年

概要

日本人の英語力の低さの背景に学習方法の問題があるとし、フォニックス導入による改善の可能性を論じる。

# 協議会報告①

教科・科目名 英語コミュニケーションⅡ

記録者名 安倍 聡子

## 1. 授業者より 英語科 石井 俊 先生

当初は、フォニックスを延々とやるという授業案を考えていた。本校には英語が苦手な生徒が多いが、どこで躓いているのか、どう指導したらいいのかということを、英語の授業を通して他教科の先生方にも考えてもらいたかった。

英語が苦手な生徒は、リスニングがほとんど聞き取れなかったり、中学校の英単語が十分に身に付いていないケースが多い。知らない単語に出会うと声に出して読めなかったり、英単語を1文字1文字ずつ書く生徒もいる。例えば、"my high school"を、m, y, myhighscool のように書く。こうした生徒たちに、フォニックストレーニングが有効だと考えている。フォニックストレーニングは、いわゆるディスグラフィア（書字障害）などにも有効だとする研究もある。

まず、アルファベットは表音文字だということから指導する。アルファベットを漢字のように捉えている生徒もいるからである。それから文字と音の関係や、この綴りはこういう音を表すパーツだということを丁寧に指導し、何度も繰り返してトレーニングする。すると少しずつ読めるようになる。少なくとも、英語が全く分からないという状態を脱することが多い。授業を通して、徐々にその効果が現れつつあると実感している。

本時の授業で最も工夫したことは、明確なゴールを設定して学習意欲を引き出し、学習への興味を持つようにした点である。生徒は普段から活動の際には結構積極的に動いているが、今日も多く生徒が意欲的に参加してくれたと感じている。

## 2. 協議内容

### 「良かった点」

#### ①学習目標の明確化

- ・本校の「授業の流れ」を提示するという目標において、プリントで明示されていて生徒にわかりやすいよう工夫されていた。
- ・学習の見通しと目標が視覚化され、かつ一致しており予定通り行われていたのでよかった。

#### ②発問の工夫

- ・生徒が聞いて話すという一連の活動に参加できるような仕掛け作りができていてよかった。
- ・冒頭に皆で一緒に行った発音練習も、ウォーミングアップ的な役割を果たしていてよかったと思う。
- ・インタビュー活動はすごく活発で動きがあり、海洋科に合った内容だったと思う。

#### ③ICT の効果的な活用

- ・ICT を活用しつつ、単語を1つ1つ区切って発音を非常に大事にしていた点。
- ・ICT 機器のハプニングにも冷静に対応していて、日頃からICTをよく活用しているのがわかった。

#### ④その他

- ・スライドがシンプルでわかりやすかった。
- ・できる生徒が、英語が苦手な生徒をフォローしてあげている場面がよかった。
- ・英語が苦手な生徒にどう教えるかという石井先生の努力も垣間見えたし、そうした生徒にどう興味を持たせるかという工夫も見られた。
- ・英語が苦手な生徒も多いと思うが、実際にやり取りする場面で多くの生徒がよく動いていた。
- ・プリントを見て何をすればよいか分からない生徒もいたと思うが、お互いに助け合って教えている場面もありよかった。
- ・フォニックストレーニングについて、春から行っていて効果が出てきている感じがした。
- ・発音練習を何度も反復しているのは非常によいと思った。
- ・小・中学校含めて、英語が苦手な子、トラウマを抱えている子に、英語の感覚を身に付けさせようと石井先生がフォニックスなどを取り入れて、身体で覚えさせようと果敢に挑もうとしている姿が見られた点がよかった。

### 「課題点」

#### ① 学習目標の明確化

- ・生徒に授業の最後に「何をやった？」と聞いたら、わからない、英文が書けなかったという生徒がいた。
- ・「授業の流れ」の中で、今、どこをやっているか確認する作業をしたらもっとよかったのではないか。

#### ②発問の工夫

- ・先生と（よくやり取りしていた）生徒とのやり取りをもっと皆に披露してはどうかと思った。
- ・授業の冒頭、声が小さい生徒がいたので、立って話させたらどうかと思った。
- ・いろいろな人にインタビューさせるという活動でもっと具体的な指示があれば動きやすいかと思った。
- ・フォニックストレーニングの時、発音している子としていない子がいて、そこで結果に差が出てきているのかなと思った。
- ・インタビュー活動の際、グループを作れない子がいるので、例えば、縦5人で、など列を区切って最初からグループを組ませてやらせてもいいのではないか。
- ・インタビュー活動の際、取り残されている生徒について、フリーでやらせる前に最初に隣や縦で強制的に組ませるとよいと思う。

#### ③ICT の効果的な活用

特になし

#### ④その他

- ・どうしても授業についていけない生徒もいる。そうした生徒たちをどうサポートしていくか。一番できない子に文法などどう教えていくか。

- ・「どこへ行きたいか」「何をしたいか」など、日常でよく使う良い会話表現だったと思うが、果たしてそれをどこまで定着させることができるか。
- ・プリントに意味を書かせる作業があったかと思うが、特に本校の生徒に顕著だが、ほとんど手が動いていない生徒がいたので、もっと具体的な指示があればよいと思った。
- ・まとめの時間が足りなかったというのもあると思うが、授業の中で、先生と生徒の間にフィードバックのようなやり取りがあってもよいと思った。
- ・インタビュー学習25分の間に、別の学習活動を入れてもよかったのではないか。少し間延びしている感じもした。

### 3. 指導主事より 指導主事 浅野 朋央 先生

まず、発音、フォニックスを中心に発音させるということに重きを置いており、活動に入った際、生徒が英語を話す時、全く抵抗感がなく、これは日々の活動の積み重ねなのだろうと感じた。

2つめに、目標と流れについて活動に入る前に丁寧に説明されていて、生徒はこういうことができればいいのだと明確になり、これからどういうことをやるのかが具体的にイメージできていた。私自身も先生の目標と流れを聞いて、これからこういうことをやるのだなと非常にイメージがわいたので、生徒もすんなり活動に参加できただろうなと思った。

3つめに、インタビューがこの授業のメインになっているが、「どこに行きたいか」とは自分にも相手にも関わることで、「あの人、どこに行きたいのだろう、そして何をしたいのか」という活動の目的がはっきりあり、生徒たちを見ていても、短時間で十数人と話していた。「どこに行きたいのか」と問うことを身に付けさせるのが一番のメインだったと思うが、十数回練習したということが非常に大きいことだと思う。普通、練習といったら、隣や後ろの生徒とやって終わるぐらいだが、十数回できたということが非常によかったと思う。

そして、ただインタビューして終わるのではなく、何人に聞いた結果、一番人気があったのはこれだというように、活動にしっかり目的があったと思う。ただやりっぱなしではなく、やったことを最終的にデフォルトしてまとめるという目的があったことも非常によかったと思う。

なかなかできない生徒もいて、難しい面もあるかもしれない。そうした生徒に、なかなかできないだろうと思い、先回りして用意し、それを読むという形になってしまう場面があると思う。しかし、今回の資料にもあるが、生徒が主体的に学ぶためには、知らないことを自分で調べたり、やりたいことなど自由度を高めていくことがひとつ考えられるかなと思った。

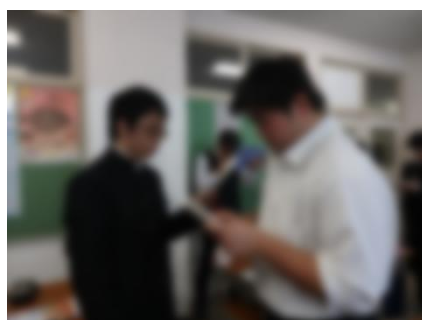
どなたかもおっしゃっていたが、先生が「できたか？」と生徒に問いかけていたが、それは非常に大事なことで、定着を図ることにもなるし、褒めることにもつながる。また、いくつかのペアを選んで発表させて共有することもあるし、先生が何人かと共有することもあるかと思う。発表を共有することでより理解が深まっていくのかとも感じた。

また、先生方の感想を聞き、非常に指示を意識されていると思った。例えば、「できるだけ多くの人と」では何人とやるのかわからない。具体的に何人とやりなさい、最初は隣の人や後ろの人、次は斜めの人、など具体的に指示した方が生徒は分かりやすいと思った。また、レポートをまとめる際、困っている生徒

を前の席の女子が助けていた。このようにフォローし合える関係は非常に素晴らしいと思った。  
これは英語だけに限らず、通常の授業でも普段からやられていることがつながっているのだなと思い、非常にいい場面を見せていただいた。

最後に、英語では完璧さや正確さも非常に大事だと思うが、そこにあまりこだわり過ぎず、今日見ていて、やはり「話した」とか「伝えた」という感覚が非常に大事なのだなと思った。本当に話せるようになったのかというより、生徒が話す喜びを感じる、そうしたところを伸ばしてあげてほしい。できないことが気になってしまい、そうしたところに目が行きがちだと思うが、できることやできたところに着目して、そこを褒めてあげてほしい。こういうところができるのだったら、こういうこともできるのではないか、とできるところに着目し、学ぶ喜びや英語を話す喜びを引き出し、英語を勉強してみたい、英語を話してみたいというところにつなげていただければよいと思った。

今日の授業を見て、生徒たちが英語を話そうという姿が見られたので、石井先生の日頃の努力が垣間見られた。今日はどうもありがとうございました。







# 水産科 「漁業」 学習指導案

日 時：令和7年10月27日（月）5校時

場 所：1年海洋科教室

対 象：1年海洋科13名

授業者：畠山 康治

教科書：漁業（文部科学省）

## 1. 単元名 「第1章 漁業と海洋環境 第4節 漁場と漁場調査 第2 漁場の調整」

### 2. 単元の目標

- (1) 漁場の調整について理解する。【知識及び技術】
- (2) 漁場の調整をはじめ、漁場についての課題を発見するとともに合理的かつ創造的に解決する。【思考、判断、表現等】
- (3) 漁場について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む。【学びに向かう力、人間性等】

### 3. 単元の評価規準

#### 【知識・技術】

- ・さまざまな漁場の調整について、理解している。

#### 【思考・判断・表現】

- ・漁場の調整をはじめ、漁場についての課題を発見するとともに合理的かつ創造的に解決している。

#### 【主体的に学習に取り組む態度】

- ・漁場について自ら学び、主体的かつ協働的に取り組んでいる。

### 4. 単元（または題材）について

#### (1) 生徒観

男子11名、女子2名、計13名のクラスである。積極的に発言する生徒がいる一方で、授業に対して消極的な生徒もいる。授業において、積極的に参加している生徒の声だけを取り上げるだけでなく、クラス全体に目を向けることが重要である。また、取り掛かりや作業が圧倒的に遅い生徒も多く、その点での配慮も必要と考える。

#### (2) 教材観

本時は漁場について、さまざまな漁業が行われそれらが互いに影響しないように調整が必要であることを学ぶ。漁場の調整が不十分である場合、起こりうる不具合などを考えさせたい。

#### (3) 指導観

遊漁としてではなく産業としての漁業というものを理解させ、漁場の調整には多くの問題点があることを理解させたい。また、その問題点をどのようにして解決すれば良いかを考えさせたい。

### 5. 指導計画

漁場の条件・・・・・・・・・・4時間

漁場の調整・・・・・・・・・・2時間（本時1／2）

漁場の選定と調査方法・・・・・・・・5時間

## 6. 本時の学習

### (1) 本時の目標

さまざまな分類方法により分類された漁場について理解する。

### (2) 本時について

漁場というのは何種類もあり、さらにどのようにして漁場の調整を行っていくのかということを考えさせたい。

### (3) 本時の展開

区分	学習活動と内容 【生徒の活動】	学習 形態	指導上の留意点・支援・評価 【教師の活動】	準備・資料等
導 入 5 分	1. 前時の確認 ・ 前時の復習をする。  2. 本時の課題の理解	全体	・ 本時の学習内容と関連付けるため、既習事項の復習から始める。  ・ 授業の進行予定を周知する。	ノート 教科書 (電子黒板)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">             本時の目標 : 漁場の調整について理解する。           </div>				
展 開 3 5 分	3. 本時の流れの理解 ・ 学習の見通しをもつ。  4. 操業水域により分類した漁場について確認する。 ・ 潮間帯漁場 ・ 沿岸漁場 ・ 沖合漁場 ・ 遠洋漁業 ・ 内水面漁業  5. 生息区分により分類した漁場について確認する。 ・ 底魚漁場 ・ 浮き魚漁場 ・ 瀬付き漁場  6. 漁場の調整について確認する。 ・ 調整の必要性を考える。	全体   全体	・ 本時の授業展開を説明する。 ・ 課題の取組のイメージを持たせる。  ・ 教科書の内容に沿って、操業水域により分類された漁場についての説明をする。  ・ ノートやプリントへの記入の仕方について、分かりやすく説明する。  ・ 教科書の内容に沿って、生息区分により分類された漁場についての説明をする。 ・ 机間指導で確認、助言をする。 <div style="text-align: right;">＜評価Ⅱ＞</div> 【発問】「なぜ漁場の調整が必要なのか？」 ・ 漁場調整の必要性について発表させる。	教科書 (電子黒板)  黒 板 (プリント)  黒 板 (プリント)
まとめ 1 0 分	7. まとめ ・ 本時の振り返りをして、ノートを確認する。  8. 次時の内容の理解	個人 全体	・ プリントやノートで学習内容を確認し、生徒にも確認を指示する。 ・ 課題提出した生徒とのやり取りで理解を共有させる。 <div style="text-align: right;">＜評価Ⅰ、Ⅱ＞</div> ・ 次時の連絡をする。	振り返りの記入 (プリント・ノート)

I 【知識・技術】、II 【思考・判断・表現】、III 【主体的に学習に取り組む態度】

## 協議会報告②

教科・科目名 水産・漁業

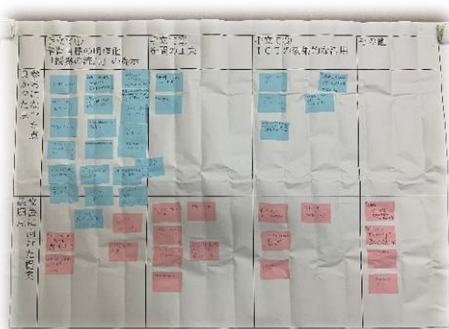
記録者名 佐藤江利子

### 1. 授業者より 水産科 畠山 康治 先生

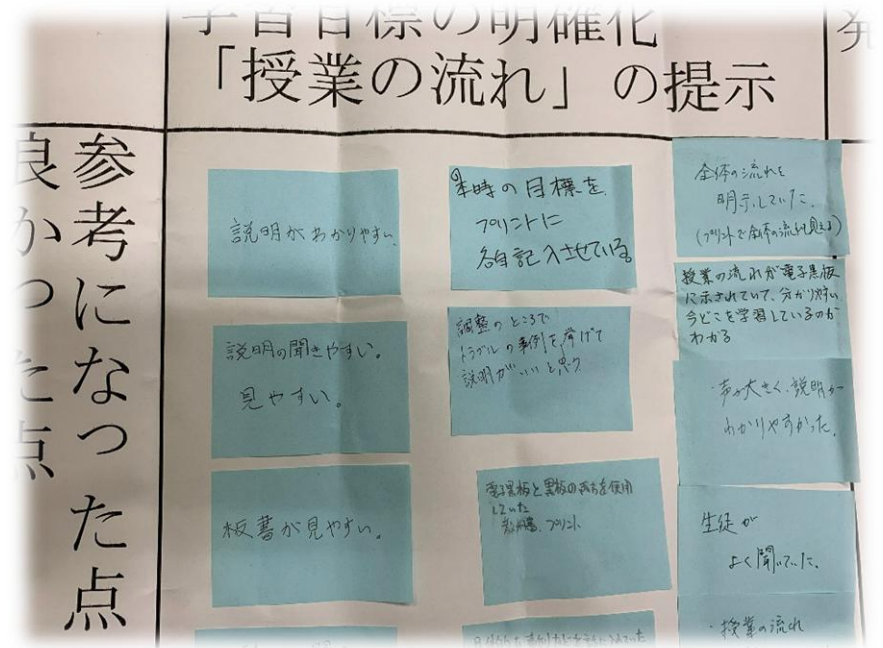
1年生のこのクラスには様々な生徒がいる。以前に比べて生徒の質も変わってきたため、生徒に合わせた授業を心がけている。ICT教育は必要だと感じているが、以前、生徒にタブレットを使わせた際、YouTubeや漫画を見て、近くへ行くと画面を切り替えるといった生徒がおり、そのような生徒にも対応しなくてはならないことがあった。そのため、1年生については、人の話を聞き集中することを重視し、タブレット端末は使用していない。2年生3年生になるにつれて、画像などを示したり、自分では板書しづらいところなどを示したりしている。タブレット端末を使用した授業の利点が多いと思うが、簡単なテストでも著しく低い点数をとる生徒も多く、生徒にとってわかりやすい授業ということで、今回のような形にした。

ICT活用についてもう一点、Power point による授業は、1つ作ると使い勝手が良いなど利点がある。一方、自分が板書しそれを生徒が書くようにさせると、生徒が書く様子を見て、書いているか、疲れているかといったことを確認しながら進めることができる。また、Power point で授業をすると、次々早く進んでしまう傾向がある。こうした点も踏まえながら活用したい。

今日の研究授業に関しては、内容が多すぎたことを反省している。最後のほうが尻切れトンボで終わってしまった。今日できなかった部分は、時数としては余裕があるので今後やっていきたい。生徒が振り返ったときに理解ができてるように、もう少しスローペースで行えばよかった。よく分からなかったという生徒もいれば、中にはずば抜けて理解している生徒もおり、その差が激しく、理解度の高い生徒に合わせるのが難しい状況であるのも課題である。



### 手立て③ ICTの効果的な活用



## 2. 指導主事より 指導主事 大淵 亮 先生

水産高校の基幹となる漁業という科目において、本時は漁業の調整という水産業の根幹に関わる重要なテーマをとりあげていただき、私自身も深く学ばせていただいた。畠山先生の深い博識に基づいた丁寧な指導とそれに応えようとする生徒の皆さんの真剣なまなざしに心から敬意を表する。

現行学習指導要領では、育成を目指す資質能力の3つの柱として、教科科目の目標が明示されている。その目標に基づいた授業作りになっていた。水産科の魅力を伝えながら水産の見方考え方を生かした授業実践となっていたことも重要な点かと思う。今年度の授業改善重点事項などをふまえて、とくに素晴らしいなと感じた点や今後の飛躍のために気づいたことをお話しできればと思う。

素晴らしいなと感じた点は、本時の狙いの置き方である。指導観で、遊漁としてではなく産業としての漁場を理解させたいと記されている。まさにこの視点こそが水産高校における専門教育の核心であると強く共感した。本時のテーマである漁場の調整は、単に魚がどこに生息しているかという知識にとどまらず、なぜそこでルールが必要かという、漁業が産業であるからこそ生じる課題に迫ることだった。この本質的なテーマに1年生のこの時期から、主体的に取り組ませた授業作りにあためて敬意を表したいと思う。生徒の思考も無理なく深めながら、非常に論理的に展開されていたのではないかと思う。

授業の前半では、沿岸、沖合、遠洋などの操業水域による分類、底魚、浮き魚などの生息区による分類といった漁場の基本的な分類について、教科書を活用しながら整理確認をしていた。これは、本時の目標である漁場の調整の必要性を理解するための重要な土台作りであると考ええる。授業の終わりの方で授業の中心的な発問である「なぜ漁場の調整が必要なのか」という問がなされた。この問いかけにより、知識の確認のフェーズから生徒が自ら考えるフェーズへと授業の質を転換させていたかと思う。単元の目標の1つである課題を発見し解決する力や評価規準の思考判断表現などを育む上で効果的な問であったと感じた。さらに学習指導案の生徒観にあるように、授業に消極的な生徒や取りかかりの遅い生徒への配慮が必要とあり、温かくも的確な分析を示していた。本時の授業ではその配慮が随所に感じられた。

授業の冒頭で、本時の流れや見通しを明確に示したり、分かりやすい例をもとに1つ1つの言葉をしっかりと学ばせていた。また、机間指導等で個別に生徒の学びの状況を確認しながら生徒の学びの状況を確認しながら助言していた。これらの丁寧な支援が生徒の安心感につながり、学習活動の参加を促していたと拝察する。特に専門教科においては基礎基本の確実な定着がその後の主体的な学びの土台となる。先生の地道で丁寧な指導に改めて敬意を表する。

今後のさらなる飛躍のために気づいたことを何点か伝えたい。

1つは、今年度の男鹿海洋高校ではユニバーサルデザインの視点を中心に取り組んでいる。例えば、文字や説明だけではなかなか理解が難しい生徒も中に入るかもしれないので、タブレットでなくても電子黒板に画像や動画を示すなどすればより理解が深まるのではないかと感じた。私自身、教科が土木であるので、教科書の写真や図だけではなかなかイメージや理解をさせにくいところを、よく電子黒板で画像などを示していた。

2つめは、プリントとノートを使い分けについて。例えば、授業の流れを示すところで「このような使い方をするよ」と示したり、まとめのところで活用したりするのもよかったのかなと感じた。また、ユニバーサルデザイ

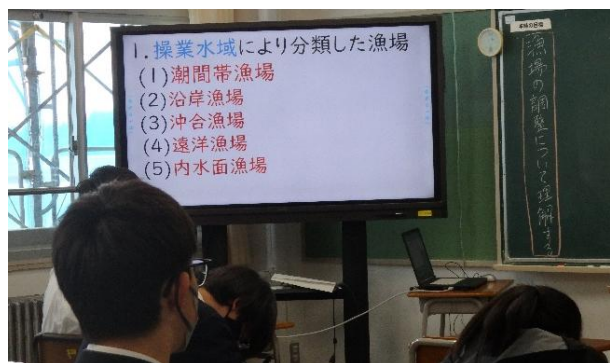
ンの視点からチョークの色使いについて、今日は赤いチョークを中心に使っていたがもう少し検討いただいてもよかった点かなと感じた。

先ほども触れたが、現行学習指導要領では3つの資質能力の育成を目指した教科の目標が示されている。学習指導案の中には発問において漁場調整の必要性について発表させるとあったので、生徒の中には学び取った知識を是非発表したいという生徒もいたのではないかと思います。発表させて、そして評価の2のところを見る場面をしっかりと作るとよいかなと感じた。

その際の視点として、例えば、先生が教えたいことから生徒が学びたいことに少し視点を変えていただき、授業作りに活かしていただければと思う。

先生の指導観の中に、「問題点をどのようにして解決すればよいかを考えさせたい」とあり、また、単元の目標には「協働的に取り組む」とも掲げられている。特に協働的な取り組みは専門科目において非常に重要な要素に入るので、協働と解決の模索を組み合わせてもらいたいと思う。例えば、ある漁場において、底魚の漁場と浮き魚の漁場が対立した場合、どう調整するかを生徒に考えさせてもよいのではないかな。その際、個人で考えるだけでなく、グループで、例えば漁業者、漁協、県、など異なる立場を与えてシミュレーションしながら議論させるなど、消極的な生徒も巻き込んだアクティブな協働的な学びが展開できるのではないかなと思い提案させていただいた。

結びに、本時は漁業の調整という水産業の根幹をなす重要な課題であり、生徒の皆さんがそのような意識を持って学ぶ極めて重要な舞台を築く授業であった。1年生のこの時期に、先生の指導の下で漁業の面白さと難しさの両方を学べる生徒の皆さんは幸せだなと感じた。本時のなぜの問いを次時の探究に是非つなげていただき、生徒の皆さんの思考力・判断力・表現力をさらに育てていけることを期待している。今後も畠山先生には水産科を代表し、提案性のある授業作りや周囲の先生と連携し積極的に挑戦していただきたい。また、次の時代を生きる生徒の育成に積極的に取り組んでいただきたいと思う。本日はありがとうございました。





# 授業のユニバーサルデザイン化に向けた取り組みと成果

教務部・研修部

今年度、本校では授業改善の一環として、全ての授業で「授業の流れ」を提示する取り組みを実践しました。年度初めに全職員に向けて、以下のような形で趣旨と具体例を周知しました。

また、取り組み開始から半年後の10月に、全生徒へアンケートを実施し、この取り組みの成果と課題をまとめました。甚だ簡単ではありますが、記録として研究紀要に残しておきたいと思います。

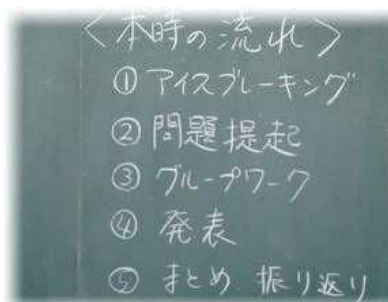
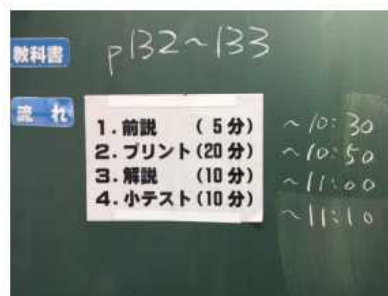
## 授業改善の取り組みのお願い

教務部・研修部

今年度、授業改善の全体的な取り組みとして、次のことをお願いします。

### 「本時の目標」に加え、「授業の流れ」が見える黒板の工夫

「今日の授業がどのように進むのか」が見えることを目的とし、次のような提示をイメージしています。詳細な提示ではなく、大まかな流れで十分です。習慣化するまでは時間がかかるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

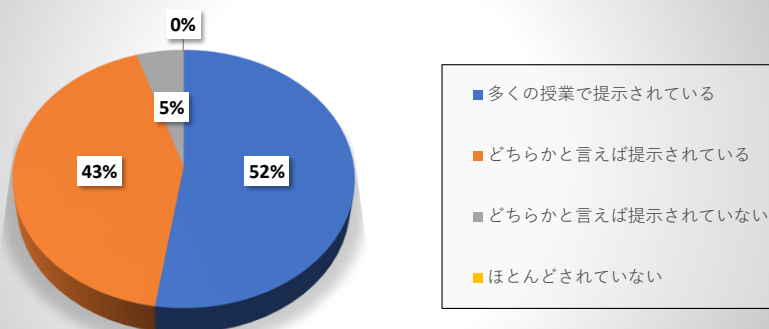


# 「授業の流れ」の提示に関するアンケート

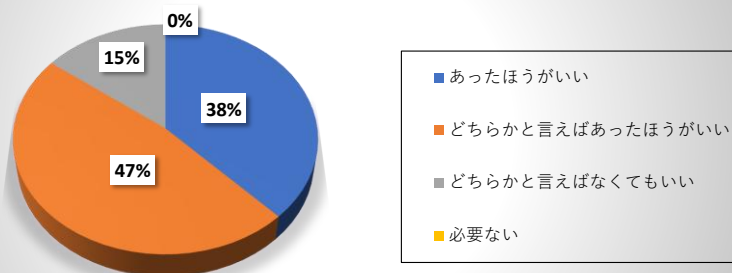
実施日：令和7年10月8日（水）～10日（金）

回答数：82／85（96.5%）

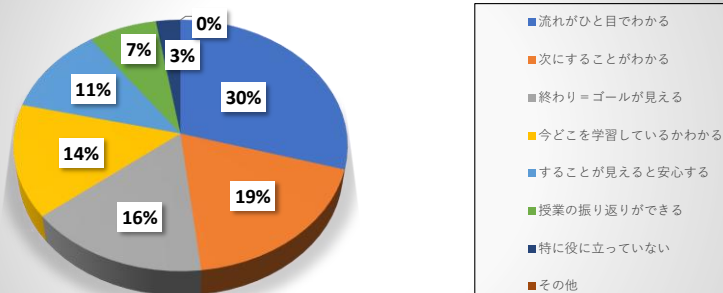
## ①本校では「授業の流れ」が提示されていますか？



## ②「授業の流れ」の提示についてどう思いますか？



## ③「授業の流れ」はどのようなことに役立っていますか



### 【アンケート結果から】

- ①「授業の流れ」は各授業で概ね提示されており、生徒にもその存在は定着していることがうかがえる。  
ただし、すべての授業で毎時間提示されているという状況には至っていない。
- ②8割の生徒が「授業の流れ」の提示を肯定的に捉えている。  
ただし、「どちらかと言えばあったほうがいい」という、やや消極的な受け止めの生徒が4割と多い。
- ③「授業の流れ」の提示によって授業の全体像や次にすることがわかるため、生徒の学習活動に役立っている。  
また、一定の「安心感」につながっていることがうかがえる。

### 【成果と課題】

「授業の流れ」の提示によって授業の全体像や学習活動が可視化され、本校が目標としている「授業のユニバーサルデザイン化」に一定の効果を発揮している。一方、「無いよりはあったほうがよい」といった、やや消極的な受け止めの生徒も多い。このため、「授業の流れ」を提示するだけで満足せず、導入時や展開の中で生徒と一緒に確認するなど、より効果的な活用方法を模索する必要がある。生徒の側にも「授業の流れは活用するもの」という意識を定着させたい。そのためにも、各教科において継続が必要である。

## Ⅱ 研修記録

○秋田県総合教育センター

研修講座受講者

○校内職員研修①（実習体験）

校内職員研修②（生徒指導）



令和7年度 秋田県総合教育センター研修講座受講者名簿（A・C講座）

（敬称略）

- A－27 県立学校新任校長研修講座 5/9（金）、6/4（水）、6/5（木）  
参加者；（校長）野呂田義彦
- A－31 県立学校新任教務主任研修講座 5/27（火）、10/23（木）  
参加者；（教諭）秋山大一
- A－34 高等学校新任学年主任研修講座 5/16（金）、6/27（金）  
参加者；（教諭）齋藤美津子
- A－37 高等学校新任生徒指導主事研修講座 5/20（火）、10/20（月）  
参加者；（教諭）畠山康治
- C－31 救急に役立つ応急手当 5/19（月）  
参加者；（実習助手）三浦誠一 （実習助手）鈴木 元
- C－35 基礎的な動画編集とその活用 7/25（金）  
参加者；（実習助手）鈴木 元
- C－36 発達の段階に即したプログラミング演習 7/1（火）  
参加者；（教諭）鈴木 航
- C－37A 学校におけるICT活用の基礎（Google Workspace） 8/19（火）  
参加者；（教諭）佐藤江利子
- C－39 いじめの理解と対応 5/20（火）  
参加者；（実習助手）三浦誠一 （実習助手）鈴木 元
- C－40 学級・学校づくりに活かす伝わる言葉のかけ方 8/7（木）  
参加者；（教諭）佐々木千晶 （臨時講師）安倍聡子  
（実習助手）三浦誠一 （実習助手）鈴木 元
- C－41 児童生徒理解に活かすアドラー心理学 7/24（木）  
参加者；（実習助手）三浦誠一 （実習助手）鈴木 元  
（臨時講師）安倍聡子

- C－42 不登校の理解と支援 8/20（水）  
参加者；（実習助手）三浦誠一 （実習助手）鈴木 元
- C－45 アセスメントの方法と指導の実際 6/13（金）  
参加者；（養護教諭）櫻庭早由利
- C－48 発達が気にかかる子どもと保護者の支援 9/4（木）  
参加者；（教諭）石井 俊 （教諭）伊勢達私  
（実習助手）三浦誠一 （実習助手）鈴木 元

# 職員研修（実習体験）実施要項

研 修 部

期 日：令和7年7月25日（金）

※予備日：令和7年8月1日（金）

目 的：普通科と水産科を併せ持つ学校として、普通科教員は、水産科生徒の日ごろの学習・探究活動を体験し、今後の指導に活かす。また、水産科職員は、普段の生徒への指導を再確認し、今後の生徒への明確な作業手順や安全指導を確認する。

対 象：全教員 ※後日希望を募ります

内 容：真山丸・NAMAHA G E 体験乗船

<日程>

9：00～14：00 体験乗船（釣り実習） （9時艇庫集合）

<乗船場所>

真山丸→艇庫 NAMAHA G E→漁協  
（艇庫で準備して向かいます）

- ※ 駐車場所は艇庫前でお願いします（できる限り相乗りで駐車台数を減らすようお願いします）。
- ※ 動きやすい服装（例 運動着・作業着）で参加してください。
- ※ 帽子・タオルを準備してください。
- ※ 長靴か運動靴で参加してください。（革靴は不可）
- ※ 各自飲み物・昼食を準備してください。
- ※ 乗り物酔いが不安な方は、酔い止めの薬を飲んできてください。
- ※ 釣り道具は貸し出しますが、こだわりの強い方は持参してください。

実習代：500円（サビキ、エサ、おもり など）

研修当日の参加者 真山丸16名 NAMAHA G E 9名 合計25名

天候にも恵まれ、多くの職員が乗船釣り実習を満喫できました。大型のアジやサバが沢山釣れました。

## 令和 7 年度 校内職員研修実施要項

研修部

1. 目的 秋田県警察の担当者より、近年報道されている薬物犯罪の最新情報および管内の少年非行の現状等をお話いただき、生徒指導や非行防止に役立てる。
2. 日時 令和 7 年 9 月 9 日（火） 15：20～16：20（約 60 分）
3. 対象 本校職員
4. 場所 本校会議室
5. 講師 少年育成支援官 高橋 恭子 氏 秋田県警察本部  
秋田臨港少年サポートセンター主任専門官  
  
警 部 大友 健一 氏 秋田県警察刑事部 組織犯罪対策課  
組織犯罪捜査室 薬物・銃器特別捜査班長
6. 研修テーマ 「薬物犯罪および本県の少年非行の現状と対策」
7. 内 容
  - ・薬物犯罪等の現状と対応について
  - ・県内、特に秋田市・男鹿南秋地区における少年非行の現状
8. 次 第
  - ①校 長 挨 拶
  - ②講 師 紹 介
  - ③講 義
  - ④質 疑 応 答（時間がなければ省略）
  - ⑤閉 会
9. 準 備
  - ・プロジェクター
  - ・スクリーン
  - ・パソコン
  - ・マイク（必要に応じて）
  - ・資料印刷
  - ・題字（研修テーマ・講師）
  - ・会場設営
  - ※研修部で準備
10. そ の 他
  - ・講師控室は図書室

# 研修の概要

## 1. 秋田市・男鹿南秋地区における少年非行の現状について

管内の少年非行状況に特別大きな変化はない。ただし、リストカットなどをはじめとする、精神的に不安定な子どもたちの増加を懸念している。こうした子どもたちの多くは慢性的に孤独感を感じていたり、家族関係に何らかの問題を抱えているケースが多い。

家族関係や孤独の背景を理解し、子どもたちに「寄り添う」「信頼できる大人と一緒に考える」という姿勢が何よりも必要である。

## 2. 薬物犯罪の現状と対応について

### ①近年の動向

主として20～30代の若年層の間で大麻が横行している。薬物前歴のない者が多く、入手先は秘匿性の高いネットの掲示板によるものが大半である。乾燥大麻のほか、大麻リキッドと称される液状大麻も横行している。電子タバコと同様、市販のカートリッジで吸引できることから急速に広がっている。令和5年には中学生を任意送検しているほか、令和6年にも少年を複数検挙しており、少年に対する啓発活動が重要な課題である。

また、安全で合法だと謳われている「CBD：カンナビジオール」（＝大麻草などから抽出される成分のひとつでリラックス効果などがある、とされているそうです）を用いた商品の中に、麻薬や指定薬物が混入している場合もあり、注意が必要。

### ②生徒へ伝えていただきたいこと

大麻は「ゲートウェイドラッグ」と呼ばれ、すべての薬物使用の入り口となりやすい。ファッション感覚で使用しているケースも多いが、身体的な影響や検挙された場合の社会的責任は重い。警察が動いている場合は既に事件化されているケースが多いので、「未然防止」が最も重要である。先生たちのひと言が、「一線を越えるブレーキ」となる場合もあるので、機会を見つけて正しい知識を伝えていただきたい。

少年非行や薬物犯罪の最前線で様々な問題と向き合っているお二人のお話は、具体的で説得力がありました。加えてお話が非常に上手で、テーマを考えると不謹慎ではありますが、楽しく勉強させていただきました。とても充実した職員研修となりました。



# Ⅲ その他の記録

○校種間連携研修講座要項

○教職インターンシップ要項

## 令和7年度校種間連携研修実施要項

- |   |        |  |
|---|--------|--|
| 1 | 目 的    | 職業に関する学科等の授業を参観することにより、これまでの実践を通じた経験を踏まえ、現在指導の対象としている児童生徒へのキャリア教育を意図的・計画的に推進する資質能力の向上を図る。  |
| 2 | 主 催    | 秋田県教育委員会   |
| 3 | 期 日    | 令和7年9月11日（木）   |
| 4 | 会 場    | 秋田県立男鹿海洋高等学校   |
| 5 | 対象者    | 秋田県公立小・中学校及び義務教育学校の教諭として、採用後5年目を迎える者とする。ただし、採用時に初任者研修対象外となった教員も含むこととする。<br>小学校教諭10名 中学校教諭7名 義務教育学校教諭2名 計19名  |
| 6 | 日程及び内容 | 12:20～12:40 受付<br><br>12:45～12:55 諸連絡<br><br>13:05～13:55 授業参観<br>・課題研究「作品制作（試作品）」<br>（食品科学科）<br>・水産海洋基礎「ロープワーク」<br>（海洋科）<br><br>14:05～14:55 施設見学、体験（風と海の学校 あきた）<br><br>15:05～15:55 情報交換（会議室） |
| 7 | その他    | 研修対象者は実践的指導力向上期であることを意識し、本研修の運営に積極的に関わる。   |

# 令和7年度教職インターンシップ実施要項

研修部

○期 間 令和7年9月17日（水）～19日（金）（3日間）

○実 習 生 秋田大学理工学部3年生  
（3名） ・取得予定免許：高校理科（物理）

秋田大学理工学部3年生  
・取得予定免許：高校理科（物理）

秋田大学理工学部3年生  
・取得予定免許：高校数学

○控 え 室 職員休憩室（印刷室向かい）

※ご不便おかけしますがご協力願います。

## ○実習計画

9月17日（水） ・オリエンテーション  
・授業参観 理科：2校時科人（1普）など  
数学：2校時数学Ⅰ（1食） 3校時数学Ⅰ（1普）など  
・実習体験 5～6校時総合実習（2食）  
・放課後 日誌記入、部活動見学 その他

9月18日（木） ・授業参観 理科：1校時化学基礎（2海） 4校時生物基礎（3普）など  
数学：1校時数学A（1普） 2校時数学Ⅰ（2普）  
4校時数学探究（3海）など  
・実習体験 5～6校時課題研究（3食）  
・放課後 日誌記入、部活動見学 その他

9月19日（金） ・授業参観 理科：1校時化学基礎（2食） 3校時科人（1普）  
4校時科人（1海）など  
数学：1校時数学Ⅰ（1普） 4校時数学探究（3食）など  
・実習体験 5～6校時水産海洋基礎（1食）  
・放課後 日誌記入、部活動見学 その他



教職インターンシップ活動内容報告書

秋田大学理工学部

氏 名	
所属学科等	数理・電気電子情報学科 数理解科学 コース
インターンシップ先	秋田県立男鹿海洋高等学校
活動内容と 学んだこと	<p>(1日目) 9月 17日</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>PCを配布し、classroomを利用して休みの人にもやったこと、黒板の写真がみれるようになっていた。</li> <li>数学を小人数で行うことにより生徒1人1人に分かるまで授業をしていた。特に根を同じにすることで、ここに戻るということができれば分かるような構成になっていた。</li> <li>梨のジャムの袋詰めとシール貼りをした。</li> <li>生徒に気を配って、菌が入らないようにどう言教するのかを学んだ。</li> </ul>
	<p>(2日目) 9月 18日</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>合同で何を示すべきなのか、つかえる知識は何なのかを明確にした上で証明を行っていて基礎の復習をしっかりとっていた。</li> <li>三角形の対応角を常に意識するよう注意を引いていた。</li> <li>大事な性質を自然に話の中に織り込んでいたことから、この教材を扱うに当たっての考察をしっかりと無理だなど感じた。</li> <li>証明を書くことに対しての苦境や教員の緩和の為に使える、テンプレートを用意することで書くことに対する敷居を低くしていた。</li> <li>蒲鉾の商品名と原材料のシールを見えた。作った蒲鉾や味噌の梨ジャムを学内や地域で売り出して、そういった繋がりを作っていることを学んだ。</li> </ul>
	<p>(3日目) 9月 19日</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>関数のグラフの導入で生徒がどこでつまづいたとか、分かっているところを明確にするために生徒に問い返したり、その分野の中学校の範囲まで戻って説明していたことから、高校教育の範囲だけを完璧にするだけでは足りないことを身にしみて感じました。</li> <li>授業内で生徒にリアクションを求めず黙々と返ってきていることから、生徒とのコミュニケーションも大切だと感じました。(特に昨日のニュース等)</li> <li>海に出て魚を釣られた生徒も楽しんでいたら、自分も楽しかったです。このことから、高校生=学業だけではなく、そういった社会体験も大切だと感じました。</li> </ul>

担当者  
確認欄 (印)

インターンシップ先 からのコメント	<p>今回のインターンシップを通じて、教員という仕事の多面性をよく理解しようと努力していました。授業見学だけでなく、食品科学科の実習の中で、生徒と関わり、教員にも積極的に質問する姿勢は素晴らしいです。今回の経験を今後の教職課程の学び(教育実習)に生かしてくれることを期待しています。</p>
担当者氏名	

教職インターンシップ活動内容報告書

秋田大学理工学部

氏 名		
所属学科等	物質科 学科 材料理工学 コース	
インターンシップ先	男鹿海洋高校	
活動内容と 学んだこと	<p>(1日目) 9月17日 今日は、理科、水産の授業参観を行った。理科の授業では、15分という短い間だったが、授業を通してタンパク質というテーマに沿った内容の要点を分かりやすく説明するためにプリントに穴埋めの形でまとめていることが参考になった。 水産の授業では梨ジャムの袋詰めを行った。授業を通して全商品の内容量を一定にする難しさ、袋の縁にジャムが付かないようにする配慮、熱湯での殺菌作業の大切さを知った。</p>	担当者 確認欄 (印)
	<p>(2日目) 9月18日 4校時目の生物基礎の授業では内分泌系の働きについて参観した。1日目では観察できなかった先生の行動に着目すると、問答法や図を適宜していること、教えた内容を実際に生徒に解かせるといった工夫が大切だと学んだ。 また、5、6校時目の水産の実習ではカニ入りのかまぼこのシール貼りの作業を行った。原料となるカニは漁師の方々から提供して頂いたものであり、それを加工して販売するという売上の流れを学べる良さを感じた。そして、そこから高校と地域の一体化の素晴らしさを学んだ。</p>	
	<p>(3日目) 9月19日 1校時目の化学基礎ではイオン結合について参観した。2日に引き続き先生や板書に着目して適宜理解度をチェックするために声かけや重要なポイントに下線や囲いを用いて強調するなど参考にすべき点を知ることができた。また見回りも行い生徒のサポートを行った。少人数制のクラスのため、生徒と実際に1対1で話してみても見えてきたものとしては、ある特定の問題を解答するための前提知識を理解できていないとできている子の間に差があるということである。少人数制のクラスであるからこそ大人数クラスとの違いを体感した。 3～6校時の水産実習では船での釣りを行った。魚が思ったより獲れなかったため、改めて漁師の大切さと責任を強く感じた。</p>	

インターンシップ先 からのコメント	<p>初日から列車遅延のため、焦ったことと思います。当初の予定通りに進まないことは授業や通常業務でもよくあるので、その対応力や柔軟性が現場では求められます。その練習で考えてください。皆さんが高校時代に過ごされた環境では全人果實の授業だと思いますが、様々な学校、生徒がいるので、このような少人数の実業高校との体験は、とても有意義なものになります。今後の大学生活等にぜひ役立てばと思います。これからがんばってください。</p>
担当者氏名	

教職インターンシップ活動内容報告書

秋田大学理工学部

氏 名	
所属学科等	物質科学科 材料理工学 コース
インターンシップ先	秋田県立男鹿海洋高等学校
活動内容と 学んだこと	<p>(1日目) 9月17日 177人的人数が少ない分先生がすべての生徒を見ることになり、先生と生徒が親しいように感じた。そのため、77人の雰囲気が良いと感じた。授業内での生徒の発言が時々、授業に積極的に参加していると感じた。そのために先生が生徒に問いかけたり、わかったかどうかを確認するといった工夫があった。梨のジュムの袋詰め、ラベル貼りをした。この作業をする際に、衛生管理が徹底されていたり、生徒たちが自主的に作業を行っていた。設備見学をし、生徒数は少ないものの海の様々な分野の教育を行っていることを実感した。</p> <p>(2日目) 9月18日 3年普通科の生物の授業を参観した。この77人は静かだ。授業に対してのリアクションが薄いように感じた。このような生徒でも授業に参加しやすいようにプリントの穴あけをし、あらかじめそこを生徒同士で相談する時間を作っていた。また、このとき生徒の理解度を確認するため、穴あけの進捗を確認し、つまづいているところがあればヒントを出し、自分で考えられるよう指導するという理解が深まるように工夫していた。実習ではかまぼこのラベルを見た。かまぼこに入っている魚が提供していた魚のものであったり、作った製品を地域で販売していることを知り、高校と地域が密接に繋がっていることを実感した。</p> <p>(3日目) 9月19日 2年食品科の化学の授業を参観した。この77人の生徒はやはり理解度ともに差があった。そのため、77人全体で授業を行うことが難しいと聞いた。そのため全体で教えることは重要なポイントだけに絞り、その後の実習の時間を大切に、生徒それぞれの理解度を見つ、生徒の性格に合わせて指導していた。そのためには、生徒の性格、高校生活の中での心境の変化を把握する必要があり、先生が生徒のことも観察し、よく理解していることが大切だと感じた。実習では釣りをした。座学では静かであっても実習ではいそいそとしている生徒がいた。このことから、生徒の一面だけを評価するのではなく色々な面を見てその人が持っている所を見つけてあげることが大事だと感じた。</p>
インターンシップ先からのコメント	<p>初日から列車通達のため、急だったことと思います。当初の予定通りに進まないことは、授業や通常業務でもよくあるもので、その都度対応する柔軟性が現場では求められます。その練習と考えてください。皆さんが高校時代に過ごした環境とは全く異なる授業だとも思います。様々な学校、生徒がいるので、このような少人数の実業高校での体験は、とても有意義なものになります。今後の大学生活等に少しづつ役立ててほしいと思います。これから頑張ってください。</p>
担当者氏名	

# 編 集 後 記

令和の幕開けとともに世界はコロナ・パンデミックに見舞われ、日常生活は一変しました。ようやく落ち着いたかと思えば異常気象や自然災害が毎年のように続き、米価や物価の暴騰、果ては昨年の熊騒動など、令和という時代は、これまでの「当たり前」が簡単に崩れ去る時代なのかもしれません。世界情勢を見ても、国際秩序が次々と塗り替えられたり、生成A I やロボットが私たちの生活を変えるところまできています。

このような変化は、学校現場にも大きな影響を与えており、これまでの経験だけでは対応できない場面が多くなりました。教職員一人ひとりが自らのキャリアを振り返り、主体的に研修をデザインしていくことが益々重要になっています。今後も、本校教職員の有意義な研鑽の場を設けられればと考えております。本紀要を今後の研修および教育活動にお役立ていただければ幸いです。

最後に、今年度の研修活動にご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

令和 8 年 2 月 発行

研究紀要 第 2 1 号

編 集	秋田県立男鹿海洋高等学校	研修部
発 行	秋田県立男鹿海洋高等学校	研修部